

2023年11月5日 久宝教会 召天者記念礼拝メッセージ

「ダビデとヘロデ」

水谷憲牧師

聖書 詩編 51編 1-11節

今回の「詩篇」51編は、詩篇の中で「7つの悔い改めの詩篇(6、32、8、51、102、130、143)」と呼ばれるものの1つであると言われています。これは1-2節、詩の中身に入る前に、これがどういう状況で誰によって歌われたものかという解説が1-2節に書かれてあるわけですが、そこにも書いてある通り、この詩はいわゆる「バト・シェバ事件」について預言者ナタンより叱責を受けたダビデが、深刻な罪の自覚、「ああやってしまった。どんだけバカなんやオレは」といった苦悩の中から発した祈りで、この中でダビデは自分の罪の告白と許しの嘆願を祈っているわけです。この「バト・シェバ事件」についての詳しい様子は、「サムエル記」下の11-12章に記されています。

アンモン人との「アンモン戦争」に配下の軍隊を送り出す一方で、自分はエルサレムにとどまっていたダビデは、ある夏の午後、昼寝からさめて屋上を散歩していると、一人の大変美しい女性が水を浴びているのを見かけたわけです。ダビデはこの女性に興味を持ち、人をやって女のことを尋ねさせたところ、それはバト・シェバという名前で、ヘト人ウリヤの妻だということが分かりました。そうしたところ、ダビデは使いの者をやって彼女を召し入れ、彼女がウリヤという家来の妻であると分かったにもかかわらず、彼女と床を共にしたというわけです。その後、バト・シェバが妊娠してしまったので、ダビデは戦地からウリヤをわざわざ呼び戻し「家に帰って休んでこい」とウリヤをねぎらうふりをします。ウリヤが久しぶりに家に帰って妻と床を共にすれば、妻が妊娠しても怪しまれないだろうという隠ぺい工作です。しかし、真面目で忠実なウリヤは、仲間たちが戦地で野営しているのに、自分だけ家で飲み食いしたり妻と一緒に寝るわけには行かないとあって、家に帰りませんでした。それで隠ぺい工作が失敗したダビデは、戦地の指揮官に「ウリヤを激しい戦いの最前線に出し、彼を残して退却し、戦死させよ」というめちゃくちゃな命令を出します。そうしてダビデのもくろみ通りウリヤが戦死してしまうと、彼はバト・シェバを引き取り、妻にしました。なお、このひどい事件に付け加えると、この殺されたウリヤは「ヘト人」だったわけですが、ヘト人というのはパレスチナの先住民だ

そうで、昔も今も、パレスチナ人は本当にひどい目にあわされてきたのだなあと思わされます。もちろん、先だってハマスがイスラエルに行ったことはものすごくひどくて目も当てられない。「どちらが悪い」「どちらが正しい」などとは私たちは簡単には言えないのですが、少なくともウリヤのように何の落ち度もないのに殺されてゆく人たち、特に子どもたちのために、一刻も早く戦闘を終わらせてほしいと祈るものであります。

ダビデがウリヤを戦死させてバト・シェバを妻にしたその後、神はナタンという預言者をダビデの元に送り、ナタンはダビデの醜い罪の罰を免れる対価は、ダビデの子どもの命である、と預言しました。結果、その通り、ダビデの子どもの命はとられました。ダビデは罰から免れたわけですが、今日の詩篇のこの祈りは、1-2 節に「預言者ナタンがダビデの元に来た時」に祈られたものであるとされているわけですが、実際はナタンの預言によってダビデの子が死の床にある 1 週間のうちに祈られたものではないかと考えられます。この時ダビデは、引きこもり、地面に横たわりながら、食事もろくに取らずに、自分が王であることも、人目をはばかることも忘れ、神様の前に一人の人間として泣き崩れていたといえます。

神様に愛され、見出され、油注がれたダビデでさえも、このように醜い罪に陥ってしまいました。ダビデでさえそうですから、一人の平々凡々とした人間でしかない私たちであればなおさらのこと、いついかなる醜い罪のとりこになってしまうかもわからない。ですから私たちは日常的に、人間なんていくら頑張っても知らないうちに罪を犯してしまうものだとか開き直るのではなく、私たちがそんな弱さを常に抱えていることを思いながら、それでもできる限り悪から離れて暮らすようにつとめなければならないことを思います。

しかし、実は私たちには罪を犯すことよりももっと悪いことがある。それは、犯した罪を振り返り、懺悔し、悔い改めることをせず、自分を正当化したり知らん振りをしたりすること。イエス・キリストが生まれた時、当時のユダヤのヘロデ大王は占星術の学者たちによる知らせを聞いて、何とかイエスを探し出し、殺してしまいたいと考えていました。イエスがユダヤ人の王として生まれたと聞いて、自分の身を脅かす者となるのではないかと不安になったからです。それで、ヘロデはベツレヘムとその周辺一帯にいた 2 歳以下の男の子を、一人残らず殺させました。ヘロデ大

王による嬰兒虐殺事件です。しかし、それでもヘロデはイエスを殺すことができなかった。たくさん子どもたちを無駄に、無残に殺したにも関わらず、そのことに対する後悔も懺悔も見せなかったヘロデは、後に苦しみながら死んでいきました。そのヘロデ大王には、腹違いの子がたくさんおりました。ヘロデ・アンティパス、フィリポ・ヘロデ、アルケラオなどですが、その中のヘロデ・アンティパスは、自分の妻ヘロディアとのことで洗礼者ヨハネにとがめられたので投獄し、やむなく斬首するに至ったわけです。彼も行きがかり上のことであり、ヨハネを殺したくて殺したわけではなかった。しかし、そうでありながらも、彼は神の前に悔いることをしなかった。そんな彼は後に、ピラトと一緒にイエスを十字架につけるという、さらに大きな罪を重ねてゆくこととなったわけです。

それに対して今日のダビデは、自分の犯してしまった罪を深く悔いて、ひたすら神様に罪の許しと救いを求めています。もちろん神様はそのダビデの罪によって傷つけられたバト・シェバの尊厳や失われたウリヤの命、これからも続くはずであった二人のささやかな幸せの事をも顧み、「はい、そうですか」と簡単に赦すことはしなかった。その代償として、ダビデの子の命を求められたわけです。それはダビデにとっては身を切るよりもつらいことであつたでしょう。しかし、罪を償うということはきっとそういうことなのです。ダビデの犯した罪はそれほど重いものだったのです。そうやってダビデの幼い子どもの命が召された時、ダビデの罪はようやく赦された。その意味で、召されたダビデの幼い子どもは、自分は何の罪もないにもかかわらず、罪を償ういけにえとして命を差し出したキリスト、ダビデにとってのキリストであったとも言えるかもしれません。その小さなキリストのおかげで、ダビデは再び神様の元に立ち返り、引き続き神に選ばれた王としての歩みを全うすることを赦されたわけです。

私たちも、自分がいったん犯した罪は、自分では消すことなどできないことを知らなければならない。これくらいのことをして何も悪くはないとか、みんなやっているじゃないかなどと、自分で自分の罪を勝手に赦すことはできないし、ヘロデがヨハネの首を切って黙らせたように、無理やり知らぬ存ぜぬを通してその罪をなかったことにしてしまうおうとする、そんな権利も私たちにはない。私たちの醜い罪を赦すことのできるのはただ神だけであり、私たちがその罪を神に赦され、雪のように

真っ白に清めていただくことなしには、その罪は永遠に問われ続けるものとなるのです。イエスの弟子であったペトロとユダもそうでした。ペトロはイエスを知らないと言って見捨てたことを深く恥じ、悔いの涙を流したことで(マタイ26)、十字架のキリストによってその罪をあがなわれ、新しく生まれ変わる者とされました。しかしその一方で、イスカリオテのユダはその罪を神様にではなく祭司長や長老たちに告白してしまったために、「我々の知ったことではない。お前の問題だ」冷たくあしらわれて絶望し、首をつって死んでしまいました(マタイ27)。ユダはその罪を、まず神様にこそ告白して罪の赦しと救いを祈らなければならなかったのに、そうできなかったために悲しい最期を遂げることとなってしまった。私たちも、自らの犯した罪を神様の御前に明らかにして悔い改めの祈りを献げることがしなければ、新しく生まれ変わることなどはできない。日々自分が犯してしまっているしょーもない罪を深く自覚し、悔い改めの祈りを捧げてゆく者となっていきたいものだと思います。そして私たちが自分の罪を自覚し、神様の御前にてその罪を悔い改める祈りを献げてゆくその時こそ、私たちはキリストによって罪の赦しが与えられたことに喜びを覚えて生きることができていくに違いないと信じます。

今日は、召天者記念の礼拝ということで、先に天に帰っていかれた方々のことを憶えながらの礼拝を守っているわけですが、みなさん本当にいろんな人生を歩んで天へ帰って行かれた方々であることを思います。それぞれが、自分に与えられた人生を誠実に、一生懸命生きた方々、精一杯生きようとされた方々であったことを思います。そして神様は、そのような誠実な方々を必ずおそばに置いて下さり、今や穏やかで平安な毎日を、永遠の日々を、過ごさせて下さっているはずで、今ここに生きている私たちも、いつか必ず、もれなく天に帰る日がやってきます。その時に、私たちは先に天へ帰っておられる方々、愛する方々と、うれしく再会することができることを信じて、私たち自身も、今与えられている人生、与えられている命を、誠実に、一生懸命生きていきたいと思っています。自分の良心を欺くことなく、誠実にこれからを歩んでいきたいと思っています。願わくは、私たちが不本意ながらも誰かの命を奪ったり、誰かの命を奪うことに加担してしまったり、自分の命を突然奪われたりすることがなく歩いていくことができますように。